



須磨寺元旦

青葉の笛だより

第35号

令和3年 正月号

発行所：大本山 須磨寺

〒654-0071

神戸市須磨区須磨寺町4-6-8

TEL 078-731-0416(代)

<http://www.sumadera.or.jp/>

ご挨拶

前回のご挨拶の最初に「まさか秋の便りまでコロナのことを心配しているなど、あまり考えておりませんでした。」などと述べ、「この対コロナの生活がいつまで続くかわかりませんが、祈りと感謝の思いを重ね、心の鏡を曇らすことなく過ごしてまいりましょう。」と結びましたが、年末から年明け、更には令和三年の春まで気を配ることになるなど、夢にも思いませんでした。

さて、皆さんも川崎大師さんのお名前はよくご存じだと思います。その川崎大師さんの中には教学研究所があり、今回はその研究所の教授、佐藤隆一先生からお聞きしたお話を紹介します。

平安時代の前期、貞観年間（西暦八五九年（八七七年）に酷い咳が出て死に至る「咳逆」という病が流行り、多くの死者が出たそうです。今で言う「インフルエンザ」だと考えられます。ですが、当時は病因を恨みや祟りなどを意味する「御霊」と考えていました。そこで、その病

様が「善女龍王」勸請して請雨祈願の法を修して慈雨を齎された、その「善女龍王」の功德が伝わっていたからだともおっしゃっています。禍の元を御霊として祀ることによって鎮めるということとは、後の菅原道真公や平将門公と同じことであり、禍の元を排除せずに祀るという発想が、実に日本的で凄いいことだとも述べておられました。

先生は医学も科学もないに等しい世において、国難といえる災禍に脅かされない、信頼に満ちた世界を実現するためには何が可能かと自らに問い続け、行動したことで危機を乗り越えられたと思うと話されました。

ウイルス対策にしても行政に解決策を期待して、自らの行動による可能性を考えることの少ない現在。そして、このような状況だからこそ、生きる目的は何なのか、令和三年の丑年にモ一度考えてみませんか。

大本山須磨寺 貫主

小池 弘三

合掌

十三佛に見守られて(13)

— 勢至菩薩

摩耶山天上寺貫主 伊藤 浄厳

勢至菩薩は、『観無量寿経』（略して

『観経』）に、次のごとく説かれています。

「智慧の光をもつて、普く一切を照らし、三塗を離れしむるに、無上の力を得たまえり。この故に、この菩薩を号して大勢至と名づく。」

（三塗は三途とも。亡者の行くべき三つの道で、地獄道・畜生道・餓鬼道のこと。）

この勢至菩薩は、智慧を司る仏であり、その智慧の威光のゆえに、大勢至・得大勢至とも呼ばれています。「大いなる力を得た者」「大きな力をもたらす者」を意味すると言われています。即ち、偉大な智慧のはたらきによって、三途に代表されるような煩惱や苦悩を離脱せしめる力を持った仏さまなのです。

このように、智慧の力（威光）によって一切衆生の苦悩や迷いを取り除いて救済することこそが、勢至菩薩の誓願であり、本願なのであります。

さて、この勢至菩薩のお姿（手印）には、おおむね二つの像容があります。

一つは、一面二臂像で、胸の前で合掌されているお姿です。その合掌は未数蓮華の印相です。この未数蓮華とは、未開敷蓮華ともいい、半ば開いていまだ開き

きつていない蓮華のことで、即ち蓮の花のつぼみのことです。この印相は、衆生の心の中に秘められて、いまだ開かれていない衆生の本心（＝仏心・菩提心）を表すとともに、その未開敷の衆生の仏心を開こうとする勢至菩薩の誓願をも象徴しているのです。

もう一つは、同じく一面二臂像で、印相は左手に蓮華を持ち、右手は人差し指以外の四指を屈して胸の前に置く像容であります。そして、頭上に宝瓶を戴いています。この宝瓶は賢瓶ともいい、如意宝珠と同じく、望むものを意のままに生み出す功力（能力・はたらき）を有しています。

ところで、勢至菩薩は、仏像でも仏画においても、古来単独で信仰されることは極めて稀であったと言われています。『観無量寿経』に説かれているように、大方は阿弥陀如来を中心として観音・勢至の二菩薩が脇侍として左右に並び、阿弥陀三尊としてまつられています。即ち、勢至の智慧と観音の慈悲をもって、中尊の阿弥陀如来を助けて、三尊が一丸となつて一切の衆生を教化されるのであります。

ちなみに、右の蓮座（向って左）に観音、

左の蓮座（向って右）に勢至、その宝冠の中に、観音は化仏を、勢至は宝瓶をつけておられます。

この阿弥陀三尊は、十三仏の中では左の忌日に配当されています。

百日忌—観音菩薩（慈悲）

— 阿弥陀の右脇侍

一周忌—勢至菩薩（智慧）

— 阿弥陀の左脇侍

三回忌—阿弥陀如来

— 主尊として中央に安座

この三尊は、二七日忌の釈迦如来、三七日忌の文殊菩薩、四七日忌の普賢菩薩による釈迦三尊に相對しての配置なのです。

二七日—釈迦如来

— 主尊として中央に安座

三七日—文殊菩薩（智慧）

— 釈迦の左脇侍

四七日—普賢菩薩（慈悲）

— 釈迦の右脇侍

ところで、ここに疑問を提するお方があるかも知れません。それは次のような疑問です。

中陰の期間中、即ち死後四十九日の間、死者のみ魂は、初七日・二七日・三七日・四七日・五七日・六七日・七七日と七日毎に、それぞれの忌日に配された仏さま

の有難い教化に浴し、四十九日目の満中陰には、すでに悩みや苦しみを脱して仏の世界に入っておられるのではないか。それなのに、更に百日忌・一周忌・三回忌などと追善供養を続けて営む必要があるのかという疑問です。この疑問は当然であります。

もちろん、満中陰で成仏が確定するのが最上と思いますが、私ども人間は、殊勝の教導に恵まれても、道心堅固にしてひたすら悟りの道を求めて精進修行することは極めて困難なのであります。言えは、発心して道心を修得しても、不退転の決意を最後まで貫き通すことは至難のわざであります。私どもは、少しでも油断すると、すぐに怠惰や放逸におちいり墮落してしまいます。不断に修行することが極めて大事です。まさに継続は力なのです。こうした訳で、満中陰以後も、万全を期して追善供養を重ねて修するのであります。

なお、七七忌（満中陰）の薬師如来は、死者のみ魂を阿弥陀如来のもとに送り届ける遣送の仏といわれ、み魂を受け取られる仏さまが観音・勢至と阿弥陀如来の阿弥陀三尊なのであります。

かくて死者のみ魂は観音・勢至の有難い教化を受けて三回忌の阿弥陀如来のもとに導かれるのであります。

なお、勢至菩薩は現世利益もあらたかで、智慧の仏、開運の仏としても尊崇されています。

除夜の鐘と 千巻心経法要のお知らせ

令和二年十二月三十一日、午後十一時四十五分より例年通り、参拝者の皆様に除夜の鐘を撞いていただきます。先着百八名の方々には、記念品の特別絵馬を授与します。百八番目までの整理券は、午後九時半に鐘撞き堂前にて配布します。

百九番目以降の方も、午前二時までは自由に鐘を撞いていただくことができます。

大晦日の夜当山境内にて、清らかな鐘の音と共に旧年中の煩惱を払い、清々しい気持ちで新しい年をお迎え下さい。

また、同時刻より護摩堂におきまして、千巻心経法要を執り行います。



当山管長導師のもと、旧年の厄を払い、新たな気持ちで新年を迎えられるよう、太鼓の音に合わせて般若心経を唱えます。

新しい年を迎えるに当たって、旧年にも増して皆で助け合い、仏様の智慧をいただき、明るい気持ちで過ごしていけるよう共にご祈念したいと思ひます。

修正会のお知らせ

令和三年一月一日午後二時より、当山本堂におきまして、新春開運修正会（大般若転読法要）を執り行います。

導師が経題を唱えた後に、職衆各々が経本を展開する「転読」という特殊な読みかたで、総数六百巻に及ぶ長大なお経「大般若経」を読誦します。その功力をもって皆様の家内安全、厄除開運から、国家安穩、世界平和に至るまで、一年間の無事を祈念します。

祈願札を申し込まれた方には当日本堂にお入りいただき、導師の加持した経本で身体を加持いたします。

新しい一年のご多幸を、皆様と共にご祈念したいと思います。



授与品

五千元 祈願札（木札）・破魔矢・

腕輪念珠

三千元 祈願札（紙札）・腕輪念珠

申込期限

一月一日正午まで

須磨寺寺務所にて承ります。

須磨寺本坊 正月三が日 特別護摩祈祷のお知らせ

例年正月三が日は、護摩堂にて特別護摩祈祷を厳修しております。

令和三年度は、三が日の間での護摩祈祷札のお申し込みを頂いた方限定で、祈祷札と合わせて当年の守り本尊（虚空蔵菩薩）の梵字入り散華を授与いたします。

ご希望の方は、「正月三が日特別護摩祈祷申し込み用紙」にてお申し込み下さい。

受付での直接のお申し込みは、令和3年1月3日（日）午後2時の座までお受け出来ます。



また、コロナウイルス感染の恐れのある状況下での初詣でに對して、不安をお持ちの方もおいでのことと推察いたします。そこで、郵送でのお申し込みにも対応させて頂きましますので、「新春特別護摩祈祷郵送申し込み用紙」をご確認のうえ、お申し込み下さい。

尚、郵送でのお申し込みは令和2年12月30日（水）必着にて締め切りとさせて頂きましますので、ご了承下さい。

ご不明な点は、本坊寺務所までお問い合わせ下さい。

「正月三が日特別護摩祈祷受付係」

電話 〇七八ー七三二ー〇四一六（代）

蓮生院 十二月から三月までの行事予定

写経・瞑想体験会

お寺で写経と瞑想の体験会を致します。気軽にできますので、写経・瞑想をしたことがない人でもお気軽にご参加ください。疲れた心を癒しに超越してください。

(写経のみ、瞑想のみの参加も可能です。足を組みやすい服装でお越しください)

日時..

十二月二十八日(月)

*二十八日は瞑想会のみで時間が変わります。

一月 九日(土) 三十一日(日)

二月 六日(土) 十四日(日)

三月二十七日(土)

写経会 十四時〜十五時半

瞑想会 十六時〜十七時半

(受付は三十分前から)

*十二月二十八日は瞑想会十八時〜十九時半

蓮生院本堂でロウソクの明かりの中での

瞑想体験です。

場所..蓮生院本堂

参加費..写経五百円・瞑想会千円

事前申し込み制です。

発熱、咳、下痢、頭痛、息苦しさなどありましたら、参加はご遠慮下さい。

マスク着用をお願いします。

当日お昼までに蓮生院の寺務所にお申込みいただくか、お電話でお申し込みください。

諸事情により取りやめになることがあります。ご了承ください。

蓮生院電話番号 ○七八ー七三一ー二三二一

良寛像、句、「須磨紀行」碑

正覚院の東側に江戸時代の歌人としても名高い禅僧、良寛(一七五八〜一八三二)の像と句碑があります。

これは、須磨に在住した故岡元勝美氏の研究から良寛様が須磨寺に立ち寄り、句を詠まれた事を知った正覚院先代住職故三浦真厳和尚に依って昭和六十二年に建立されました。

良寛様は十八歳で出家し、二十二歳の頃より旅に出ました。岡山の圓通寺で修行を積んだ後、全国各地を行脚して三十九歳で故郷の越後(新潟)に帰りました。この途中、寛政八年(一七九六)一月二十四日に須磨寺に立ち寄り、

須磨寺の

昔を問へば山桜

という句を関西旅日記の一つ「須磨紀行」に残されています。またこの時、綱敷天満宮の板敷きに衣を敷いて須磨浦の波の音を聞きながら一夜を過ごしたとも記されています。

良寛像、句碑の製作者は前衛彫刻の第一人者、速水史朗氏で像の高さは一・六メートル、幅六十センチの、のっぺらぼうな黒御影石。周りには良寛様と一緒に遊んでいる子供達を表現した丸い白御影石が数個あります。後ろの句碑には良寛研究の第一

人者で新潟大学教授、加藤傳一先生の書が良寛様の書体に近い字として書かれています。良寛様の魅力は「彼の文章ににじみ出る心の温かさや純粋さ、あるいは清貧に徹した謙虚さでしょう」と加藤傳一先生は話されています。

自らを大愚と名乗り、農民と交わり、子供達と天眞爛漫に戯れ、心のままに一生を送った良寛様。その像と句碑を建立した抱負を三浦真厳和尚は、「物の豊かな時代、良寛様の様な大らかな気持ちを見直し、今の日本人の生活を見つめるきっかけになれば」と語っていました。

良寛様が人々から愛された理由としていくつものエピソードがあります。子供達とかくれんぼをしていて日が暮れてみんな



良寛 句碑 須磨寺正覚院前

が帰ったのも知らず朝までずっと隠れていた話。良寛様の庵に忍び込んだ泥棒が、何も盗むものがないので、仕方なしに良寛様の布団に手をかけたところ、良寛様はわざと寝返りをうって泥棒に取りやすくした話。廁の竹の子が伸びてきて屋根を突き破ろうとした時、ロウソクで屋根を焼き竹の子が伸びる手助けをした話など、聞く者の心を和ませずにはおかぬ話ばかりです。

又、良寛様は歌人としても有名なので一句ご紹介させて頂きます。

「たとい恒沙の書を読むとも、一句を持するに如かず。」

「恒沙」とは、とてつもなく大きな数で「恒沙の書」とは万巻の書物という意味です。知識を得るため、或いは仏陀の悟りの境地へ到達しようとして、万巻の書を読むのもよいが、これと決めた一書の中の句を、よく吟味し、自分のものにする事はさらに大事な事と良寛様は言っておられます。

良寛様は、道元を敬慕し、道元の著「正法眼蔵」を座右の書として修行を積み、釈迦の原始仏教を意識して、乞食して諸国を行脚しました。

晩年は越後(新潟)出雲崎に戻り農村の自然の中で、清貧をよしとして暮らしたと言われています。その自由な精神と宗教的寛容さで、多くの人々に親しまれ、慕われたという事でありま

お寺で学ぶ

周活知恵袋

須磨寺派昭和寺住職
中山 戒仁

「永代供養」と「納骨供養」のお話

●はじめに

終活関連の書籍・雑誌・機関紙やテレビ・ラジオ等のCMでも近年よく見聞きされる「永代供養」「永代供養付納骨堂」「樹木葬」「堂内墓地」「公営合葬墓」についてご質問やご相談をよくお受けします。今回は「永代供養」と「納骨供養」、似ているけども異なる供養のカタチについてお話ししたいと思います。

●「永代供養」とは

「永代供養」は、お仏壇を引き継ぐ人がなくて（後継者がいない）祀ることが出来ない場合などにお仏壇を閉じて処分するにあたって、お仏壇にお祀りしているご本尊様や御先祖様のお位牌や過去帳等のお精根抜き供養をして菩提寺等に預けてお祀りして頂くことです。ですから、みなさんの身近な生活空間からお仏壇はなくなりますが、ご先祖様をお祀りしなくなってもよいはありません。お祀りしなくてもよくなったということでもないのです。「お仏壇の場所を移した」、すなわちお参りに行く場所が移動したと考えるのいいのではないのでしょうか。

●「納骨供養」とは

「納骨供養」は、お墓を引き継ぐ人がいない場合等に墓じまいをした後に墓所に埋葬していたご遺骨を菩提寺等の

納骨堂等に改めて移してお祀りして頂く場合と、お墓はあるが後を引き継ぐ人がいない場合やお墓を持つていない方で諸事情によって新たにお墓を建立されない場合に新佛さんのご遺骨を菩提寺等の納骨堂等に納骨してお祀り頂くことです。ですので、新たにお墓参りに行く場所が菩提寺等の納骨をした場所になるわけです。

●「永代供養」「納骨供養」の供養のカタチとは

ひと言に「永代供養」「納骨供養」といっても色々な供養のカタチがあります。少し例を挙げますと

「永代供養」

① 家でお祀りしていたお位牌や過去帳を預ける

② 永代供養先（菩提寺等）の規定にそらえる

③ 個別の祭壇（仏壇）に位牌等を安置する

④ 過去帳等に記載して供養する等々

「納骨供養」

① 他の人と一緒に埋葬する合葬墓（合祀墓）

② 柩等にご遺骨を安置

③ 個別の柩にご遺骨を安置

④ 個別の祭壇（仏壇）等にご遺骨を安置

等々

があります。ほんの一例を挙げさせて頂いたのですが、色々なお祀りの仕方があります。故人様やご遺族の皆さんの想いに沿った供養のカタチを選ばれるのはいかがでしょうか。

ただ、お祀りの仕方・期間・立地・場所等により永代供養の志納金の多寡も変わってくることは知っておいて頂きたいと思います。

●「永代供養」「納骨供養」の選び方

それでは、「永代供養」「納骨供養」はどのように選べばいいのでしょうか。そこで一度想像してみてください。「身体が自由が利かない」「遠方に引越してなかなか行けない」等の状況になった時に何が番心配になるのでしょうか。「立地」「場所」「利便性」、

おそらく多くの方は「お参りには行けなくても、きちんとお祀りして行ける」『お勤めしてくれて』という安心感だと思います。とは言え、当然のことですが費用等の経済的なことは重要です。交通の便や立地等も軽視できないと思います。将来の生活等を踏まえて予算を組んで、皆さんの想いにより沿うように選ぶことが大切でしょう。そのため、お寺とご縁を結ぶために少し勇気を出して行動してみてください。菩提寺、少しご縁のある（面識のある）、お友達にご紹介頂いたお寺やご住職等に声をかけてみる、そしてざくば

らんに事情を説明してご相談されてみては如何でしょうか。早く相談に乗ってくれるご住職方は少なくないと思いますし、それが最も良い選び方だと私は考えます。どうしてもご縁が見つからない方は昭和寺にお声掛け下さい。

●「散骨」ってどうでしょうか？

少し余談ですが、「散骨」についてのご相談も多いので少しお話ししておきます。一個人の所感としては、「ダメだとは思わないが、難しいのでは」というのが正直なところでは、真言宗では旅立ち後はお位牌を依り代として大切にお祀りしていきます。しかし、ご遺族からするとお位牌よりもご遺骨を大切にされる方が多いように思います。カタチは変わっても暮らしを共にしてきたその人そのものですから当然のことだと思いますし、ご遺骨は故人そのものであって特別な存在なのです。このことからご遺骨のある処がご遺族からすると故人が居る場所、故人に会える場所になるわけです。とすると、ご遺骨を納めている場所が特定されない、認識できない埋葬方法は日本人の慣習にはまだ合わないように思います。海

洋散骨・無人島散骨・山林散骨等々、海岸や山林へ足を運んで、大海を墓所、山を墓標として手を合わせて心が落ち着きますか？ご遺骨を自然に還すことの大切さを理屈では分かっている、目で確認できる場所に故人がいらないと不安になりませんか。ご自身の中で宗教観・生死観というの

ものが確立しておられる方は大丈夫だと思のですが、そうでないところ遺族の迷いの原因になるように感じます。それは散骨されたご遺族の方から「何処で、何を拝んでいいのかわからない」というようなご相談をよく受けるからです。かく言う私も何かあるとおつしよさん（師僧）や祖父母等の墓参りをしてはブツブツ言つて墓掃除をしたりしています。私にとつて大切な護るべき里なんです。

●おわりに

「永代供養」「納骨供養」は、本来は自宅等で家族が勤めるべきことを色々な事情で菩提寺等に場所を移してご先祖様等をお祀りして頂くものです。「預けたからもう大丈夫」「お寺がすべてしてくれてから大丈夫」とのお声を時折お聞きしますが、預けたからそれですべてが終わったわけではありません。お正月・お盆・お彼岸の折や年忌の法事は菩提寺等にご家族や親類縁者等のみんなが集まって故人を偲んでお参りして頂くことが大きな功德になり、ご先祖様・故人や曼荼羅の諸佛諸菩薩や良いご縁を導く浄行につながっていくと思います。

皆さんのルーツや最愛の家族の生きた証を遺して繋げていくために、そして最愛の人を想うための大切な場所創りのつが「永代供養」であり「納骨供養」なんです。みなさんおひとりおひとりにあつた供養のカタチを今一度考えるきっかけにして頂ければ幸いです。

およそ六年前、生徒数が四、五人にまで減った須磨寺御詠歌講の様子をご覧になったかつての檀家総代故頼廣勇三氏から、心機一転再興を期せとのお叱りをいただき、山本師という指導者を得て、いまの金剛流須磨寺御詠歌教室があります。故頼廣勇三氏のご葬儀では、深いご恩を忘れ得ず、御詠歌教室の生徒たちが涙声で追弔和讃を詠じました。いまや生徒数約三十名の須磨寺御詠歌教室は、山本文昭師と衣巻唯明師のご指導をいただき、多少音を外そうが、明るく楽しく元気に大きな声を出すことを是としています。

御詠歌は、旋律よりも詩の心を大切にし、その心を素直に唱えます。決して聞かせるのではなく、ありません。声の良し悪しや技術の巧拙を意識することを戒めており、人格形成、信仰心の涵養^{かんよう}こそを第一の目的としています。このことは、生きていく人間がより良く生きるために、どのようなことを、どのようにすれば良いのかを深くお考えになり、それをわたくしたちに説いてくださったお釈迦さまの教えにかなっています。金剛流須磨寺御詠歌教室は、そういう教えを実践する存在であるべきだと思います。

そこで、わたくしたちは、先輩後輩の垣根ができないように配慮し、みなが和気あいあいと学べる雰囲気を作るように心がけています。また、何らかの理由で休学する場合も、いつでも気持ちよく復学できるように

これからの 金剛流須磨寺 御詠歌教室



管長さんと
八角堂落慶法要で

にし、視力が不十分な方であっても生徒として大いに歓迎いたします。わたくしたちは、いつでも広く仲間を求めており、お互いを尊重し、許容して、助け合える教室を目指します。

技術的には、プロジェクター、ＩＣレコーダーを活用し、ユーチューブ、カラオケ、山本師が自ら編集した生徒一人ひとりに適宜配ってくださるＣＤなども利用して近代化に努めています。もちろん、御詠歌は、先生と対面して教授していただくことが第一であり、

口伝で教えていただくこともあります。そのことを十分に理解した上で、利用できるものはこだわりなく利用することが合理的であり、そのことは決して御詠歌の心でないがしろにするものではないと思います。

そして、ご指導いただいている山本師と衣巻師に対しては、生徒一同、深く感謝あるのみです。関連するいろいろなお話も興味深く、優しい口調と物腰で基本を繰り返し教えてくださることは、わたくしたちにとって、大変ありがたいことです。

これまで培ってきた明朗快活さを伝統として無理なく次代につなぎ、この金剛流須磨寺御詠歌教室がいつまでも穏やかで明るく楽しい場であり続けるよう心から願っています。

金剛流須磨寺御詠歌教室生徒 山口 賢司

須磨寺の歴史 〈二十六〉

―大元帥明王法

令和二年十一月二十三日から三十日まで高野山金剛峰寺で大元大法が行われ、須磨寺からは小池弘三貫主、峯下と高知の須磨寺派寺院である金剛寺の中村照嚴住職のお二人が、二十四・二十五日に出仕されました。

大元大法とは正式には大元帥明王法と言い、入唐八家の一人である常暁が、唐から持ち帰り、八百四十年に宮中常寧殿で初めて修され、後には醍醐寺理性院で修されるようになりました。この大元大法は、唐に於いては鎮護国家・逆賊平定（安祿山の変等）の為に祈られ、国家最高の機密法に指定されるほどの重要な修法で、日本でも鎮護国家・逆賊平定（平将門の乱等）戦勝祈願（元寇等）の時に修法されましたが、雨ごいの時にも修法され、いつしか新天皇即位の時にその御代が平安であるように祈るために修法されるようになってきました。今回の大元大法も新天皇が即位した為に行われたのです。

大元大法の本尊である大元帥明王は元々、恨みを抱いて憤死した武将が鬼神に転生して復讐を誓い、疫病・殺戮・災いをもたらす悪神でしたが大日如来の功德により善神に転じました。災い転じて福となす、と言いますが、この大元大法はコナ禍をはじめとした災厄を押さえつけるのではなく、取り込み転じることによって、この令和の御代の平安を祈るものなのです。

仙師逍遙



冬の花は影がやさしい。

須磨寺参道のある垣根に、柊の花が咲いています。金木犀銀木犀に比べると、そこはかといないその香りはあまりに控え目で、まるで冬のすみれに羽根を休めるヤマトシジミのように、道ゆく人の肩にさりげない季節の句読点をおいてくれます。

さて何人の方がその小さなプレゼントに気が付かれるでしょうか。

かつて町のどこにでも見られた、表鬼門に柊、裏鬼門に南天を配したり、節分には柊鰯を飾ったりという風習も、最近では余り見かけなくなりましたが、時の移ろいの中の小さな事柄が、遠くつかしい人の顔をふと運んでくれることがあります。

終戦間もない頃、香川県の志度という町に、私は至って病弱に生まれました。瘦せて小さく産声も弱々しく、取り上

げてくれたベテランの産婆さんも果たして育つかどうかと言われたそうです。

六人の子を成した生来呑気者の母は、ほとんど病氣知らずに、人も羨むような快活な九十三歳の天寿を全うしてくれましたが、戦火に追われ転々と疎開先を移る暮らしに体調を崩していたものか、私の生まれた戦後の一時期には、長く臥せっていたと聞いています。

したがって、貰い乳と山羊の乳で育った、泣いてばかりで、おまけに身体中吹き出物のできた可愛くない末っ子には、三人いた年嵩の姉たちも近寄らず、同居していた祖母がかりつきりで面倒をみてくれたそうです。言うところのおばあちゃん子になったのは当然の成り行きでした。

物心について小学校に進んでも、よく熱を出して学校を休みました。昔のことで、すから、小部屋に寝かされひたすらタオルで頭を冷やします。朝も昼も夜も、天井板の迷路のような木目の模様と、私の額に手を当てて熱を測る骨張った細い祖母の手をよくおぼえています。

それは何歳の時のことだったか、当時は枕元に水を張ったアカ（銅製）の金盥を置いてあり、そこでタオルを絞っては額にのせてくれます。その時、タオルを替えながら祖母が口の中でボソボソと小さくつぶやく声が聞こえました。

それは

「ころりん ころりん」

というような響きで、何度か耳にしましたが、なんのことも意味不明で分からず、またそれを一度も祖母に尋ねはしませんでした。そしてそれは、小学校三年生の時に祖母が亡くなるまで、私が病気になるたび続いたような気がします。

かと言って、はつきり覚えていたわけではありません。それどころか、祖母のことにしても、母の母で四六時中、まるでコマネズミのように休みなく働いていた人だったくらいに記憶しかなくて、誠に不人情な孫であることに恥じるばかりです。

長い長い時を経て、私が仏師龍雲を名乗って十六年目。四十六歳の時に、兵庫区の金光寺様から如意輪観音様彫像のご依頼をいただきました。お納めしたのは平成六年の夏のことです。

お招きいただき開眼法要の前列の席に座していました。式典は淀みなく進み、御本尊薬師如来さまの御真言にご唱和していた時、

「オンコロコロセンダリマトウギソワカ オンコロコロセンダリマトウギソワカ」

ふと、遠い記憶が発芽を促す雨のように囁きかけてくれました。

「はっ」と気がつきました。

幼い頃病気の私の耳元で、祖母がつぶやいていた言葉は、薬師如来さまのご真言だったことに。

ただ、門徒宗の熱心な信者で、一日中

何時となく

「ナミアマミダブ ナムアマミダブ」

と口の中で唱えていた祖母が、どこでお薬師様のご真言を覚えたものか、またきちんと発声できていたものかどうか、それは今となっては何とも確かめようがありません。

けれども、その日から祖母は私の中でお薬師様となつて

「ころりんころりん」

いつも一緒に生きてくれています。

ひとがひとに本当の意味で残せるもの、それは名前でも業績でも、ましてや財産でもなく、寧ろ、日々の暮らしの中で目にした何気ない仕草や、短い言葉、その記憶の波の中からふわりと浮かび上がる泡沫のようなやさしいメッセージなどではないかと、柔らかな師走の日差しの中で、いまを開く柊の白い花を見ていました。

須磨寺大仏師 山高龍雲



一周忌	令和二年亡	二十五回忌	平成九年亡
三回忌	平成三十一年亡	二十七回忌	平成七年亡
七回忌	平成二十七年亡	三十三回忌	昭和六十四年亡
十三回忌	平成二十一年亡	三十七回忌	昭和六十年亡
十七回忌	平成十七年亡	五十回忌	昭和四十七年亡
二十三回忌	平成十一年亡	百回忌	大正十一年亡